

キャンデーで元氣百倍



つい先日、職場に小包が届いた。以前、取材でお世話になった福山市の製菓材料卸会社の専務、中島基晴さんから。中には特産の保命酒などを使った新商品のキャンデーがぎっしり詰まっていた。

三月に、取材を担当する外勤職場から、紙面のレイアウトや見出しを考える「地域

整理部」に移った。

一番の変化は、社外的な人付き合いがめっきり減った

こと。寂しさも感じていただけに、頂いたキャンデーが無性にありがたく、うれしかった。

中島さんと出会ったのは、備後本社に勤務していた二年前。幕末に黒船で来航したペリー提督をもてなしたとされる保命酒で作ったまんじゅうやジェラートの取材がきっかけだった。家業を継ぐため三十歳で大学職員を辞め

て帰郷。「食を通して古里を全国にP

Rしたい」と熱っぽく語り、アイデアを形にする姿に、いつしか取材する私も感化されたように思う。

これまで、売り出した商品は、保命酒の関連だけでも約二十種類。年々活動の幅を広

記者手帳

げており、今回のキャンデーは、沼隈地区のフドウ、田尻地区のアンズ、神辺地区のしょうゆなど九種類に上り、職場でも好評だった。

一方、今の自分はパソコンと向き合う時間が増えたためか、日々の仕事を機械的にこなしていると感ずることがある。「扱っているのは人の熱意やぬくもりが詰まった記事」。キャンデーで一息つき、情性に流されそうな自分に言い聞かせている。